

# 日本宗教学会 第84回学術大会

## パネル発表要旨集

学術大会 会期：2025年9月14日(日)－16日(火) 会場：上智大学 四谷キャンパス

開催パネル一覧 場所：2号館4階 各会場

9月15日（月・祝）13:30～	パネル題目	代表者
第1部会	宗教学とエラノスの交点と齟齬	奥山 史亮
第2部会	井筒「東洋哲学」の立場—比較宗教思想の視点から—	澤井 義次
第3部会	生長の家・谷口雅春の「實相哲学」の再検討	喜多 源典
第4部会	近世・近代の伝統仏教による教化活動—寺院・少年・女性・青年—	近藤俊太郎
第5部会	人口減少社会における五大都市圏の多宗派寺院調査	相澤 秀生
第6部会	New Directions in the Study of Japanese Religions: Reviewing <i>New Nanzan Guide</i>	Matthew D. MCMULLEN

9月16日（火）13:30～	パネル題目	代表者
第1部会	新異教主義運動の宗教史的変容—その両極性に着目して—	深澤 英隆
第2部会	戦中から戦後に到る宗教（史）研究—日本と「東亜」をめぐって—	飯島 孝良
第3部会	「メディア宗教」という視座—独立系宗教家と近代日本宗教史—	赤江 達也
第4部会	日本のアニミズム的宗教論の系譜をたどる	外川 昌彦
第5部会	宗教団体における実践と論理	溪 英俊
第6部会	バーチャル葬儀のゆくえ—映画で描く近未来像と世界の最新事例—	瓜生 大輔

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

## 宗教学とエラノスの交点と齟齬

代表者：奥山 史亮

ルドルフ・オットーとエラノス会議

藁科 智恵（日大）

エラノス会議におけるエリアーデのシャーマニズム論と大戦の記憶

奥山 史亮（北海道科学大）

エラノス会議におけるペッタツォーニ

江川 純一（東大）

コメンテーター：堀 雅彦（北海学園大）

司会：奥山 史亮（北海道科学大）

エラノス会議はカール・グスタフ・ユングとオランダ系イギリス人の神秘思想家オルガ・フレーベ=カプタインを中心となり1933年に創設した学際的会議である。分析心理学の深層心理を論じることを基層としながらも、臨床家だけでなく、宗教学や神話学、神学、人類学など様々な領域の研究者が集う場所となり、宗教と心理の根源的一体性を論じながら、大学を中心とする実証的学知に偏った学的潮流に異を唱えようとした。宗教学領域からはオットーやレーウ、エリアーデ、井筒俊彦などがかかわり、20世紀中期における宗教学が展開した一拠点であったといえる。しかし宗教学者たちのエラノス会議に対するかかわり方は一様でなく、その学風に警戒心を抱く論者も少なくなかった。本パネルではエラノス会議に対する宗教学者たちの様々なかかわり方を整理することにより、20世紀宗教学とエラノス会議の輪郭をあらためて描いてみたい。

藁科はドイツの神学者・宗教学者ルドルフ・オットーとエラノス会議との関係について論じる。オットーはオルガ・フレーベ=カプタインとの書簡においてエラノス会議の名前を提案した人物であるが、エラノス会議に参加することはなかった。さらにオットーはエラノス会議を「預言者たちの高揚」と表現し、自らの研究をそれとは相容れないものとも述べている。しかしそれでエラノス会議での主たるテーマの一つは「東西の出会いの場」であり、オットー自身も『西と東の神秘主義－エックハルトとシャンカラ』にみられるように諸地域の宗教現象に関心を寄せていたという点において、共通点を見出せることもまた事実である。オットーが人間の普遍性の次元と東西という具体的地域性の次元をどのように捉えていたかを明らかにすることは、エラノス会議で目指されたものとの相異を浮き彫りとし、またその輪郭をたどることにつながるだろう。

奥山はミルチャ・エリアーデがエラノス会議においてシャ

ーマニズムに関する研究を発表していった経緯について論じる。戦後エリアーデは、最高存在に関する研究の一環として、最高存在に接触することのできる人間に着目し、シャーマニズムの研究を展開していった。一般的にシャーマニズムは憑依型、脱魂型に大別されるものであり、それは心理学や精神医学領域においても論じられるテーマである。ユング自身も靈媒や憑依に強い関心を持っており、シャーマニズムというテーマはエラノス会議の学風に沿っていたことが予想される。しかしエリアーデが戦後の研究テーマとして上記を選んだことには、戦中ルーマニアにおいて大天使ミカエルのイコンから靈感を得た「預言者」コドリヤースが牽引したナショナリズムの現象を学的に対象として、大戦の記憶を昇華したいという動機もあったのではないか。一人の宗教学者が大戦の記憶を語り直そうとした場所として、エラノス会議について考えたい。

江川はイタリア宗教史学研究の観点から、エラノス会議におけるイタリアの宗教史学者ラッファエーレ・ペッタツォーニの活動を取り上げる。ペッタツォーニは1950年夏、アスコーナで三日間を過ごし、「バビロニアのアキトウ儀礼と創世叙事詩」をドイツ語で発表した。彼の参加はこの一回限りであった。ペッタツォーニはエラノス会議にいかに関わり、どのような感想を抱いたのか。「神話」と儀礼の連結を主張した当該テクストの内容を分析しつつ、同じくエラノス会議に関わったイタリア人研究者である仏教学のジュゼッペ・トウッチ、キリスト教学のエルネスト・ブオナイウティとの比較を通じて、ペッタツォーニとエラノスの交点と齟齬を明らかにする。またペッタツォーニとエリアーデの関係にも触れるつもりである。

コメンテーターは心理学と宗教学の交差を専門的に研究してきた堀に依頼した。各発表の後、堀のコメントを受けてからフロアを交えた質疑応答に移行する。

## 井筒「東洋哲学」の立場—比較宗教思想の視点から—

代表者：澤井 義次

井筒俊彦とアンリ・コルバン—二つの歴史観？—  
井筒東洋哲学から読み解くオルテガ生の理性とコトバ  
井筒俊彦と西谷啓治における「コトバ」の問題の比較  
宗教理解への視座—井筒俊彦とウィルフレッド・C・スミスー

野元 晋（慶大）  
ファン・ホセ・ロペス・パソス（天理大）  
長岡 徹郎（阪大）  
澤井 義次（天理大）  
コメンテータ：鶴岡 賀雄（東大）  
司会：澤井 義次（天理大）

このパネルは、イスラーム思想・東洋思想の研究で世界的に知られる井筒俊彦の「東洋哲学」について、比較宗教思想の視点から、その思想構造とその特徴を探究しようとする試みである。各パネリストは、各自の専門分野の視点から関心を寄せる宗教思想を取り上げ、井筒の哲学的思惟と比較検討する。井筒「東洋哲学」に関する比較宗教思想的な考察をとおして、井筒哲学が宗教研究において、いかなる知の地平を拓くことができるのか、その哲学的思惟の展開可能性について考察したい。このパネルでは、野元晋、ロペス・パソス ファン・ホセ、長岡徹郎、澤井義次の順で研究発表をおこなう。

まず、野元は井筒の後期思想の諸著作における歴史の見方を再検討し、フランスのイスラーム学者・哲学者、アンリ・コルバンの歴史観と比較を試みる。井筒とコルバンの思想はそれぞれ非歴史主義的な性格を有すると考えられる。前者は「東洋」の「主要な哲学的諸伝統」を「共時的構造化」する「東洋哲学」を構想し、後者は社会科学的歴史学に対して「反歴史主義」を標榜した。しかしコルバン思想には、キリスト教正統主義を批判して新たな西欧の宗教的歴史哲学を構築しようとする姿勢が見られる。では井筒俊彦はどうか。ここでは「東洋哲学」の構築を目指した井筒の後期思想の諸著作における歴史の見方を再検討し、コルバンの「歴史哲学」と比較を試みる。

次にロペス・パソスは、井筒の「東洋哲学」を枠組みとして、スペインの哲学者オルテガの存在論的立場を再解釈することを試みる。井筒は独自の「コトバ」の理論を通して、言語の深層構造を捉えた。一方、オルテガは「私は私と私の状況である」という命題のもと、主体と状況の不可分性、経験に根ざした「生の理性」の哲学を展開した。ここでは両者の思想の共通点に注目し、比較を超えた「再定位」という観点から、スペイン思想を東洋的思索の視野において読み替える可能性を検討する。井筒の哲学的視座からオルテガを読み解くことで、井

筒「東洋哲学」がいかに多文化的に開かれているかを明らかにする。

さらに長岡は、井筒と西谷啓治の言語論を比較する。井筒は構想した「東洋哲学」において、神秘思想の言語を「哲学的意味論」という独自の理論的枠組みによって分析し、意識の深層を探究した。井筒にとって言語は、単なるラベルとしての記号ではなく、存在あるいは意識の深みを開示する「コトバ」であった。一方、西谷は言語を中心主題とはしなかったが、禪や俳諧といった詩的言語を「直接経験の端的な表現」として捉え、そこに独自の解釈を加えた。両者は哲学的立場を異にしながらも、分別を超えた根源的体験に根ざす「コトバ」としての言語の働きに、宗教哲学的可能性を見出した。ここでは両者の言語論を比較することで、「コトバ」としての言語の問題について考察する。

最後に澤井は、井筒とウィルフレッド・C・スミスが提示する宗教理解への視座を比較検討し、井筒「東洋哲学」の立場とその特徴を明らかにする。井筒とスミスは長年、親交を深めたが、井筒の哲学的意味論は、スミスが言う宗教の「共感的理解」の視座と共通の問題意識をもっている。両者は宗教を宗教の内面性から理解しようとした。つまり、井筒は「東洋哲学」テクストが開示する深層意識へ迫っていき、その意味の深みを意味論的に明らかにしようと試みた。一方、スミスは人間存在が全て「宗教的」（レリギオース）であり、本来的に「超越性」に関わっていると捉え、宗教の累積的伝統への見えない人格的な「信仰」の深みを共感的に把握しようとした。

以上、4名の研究発表を承けて、コメンテータの鶴岡が、宗教思想における比較の意義という観点を交えて、各発表内容についてコメントをおこなう。各発表者がそのコメントに応答した後、全てのパネル参加者とともに全体討議をおこなう。

## 生長の家・谷口雅春の「實相哲学」の再検討

---

代表者：喜多 源典

谷口雅春と靈性思想

伊藤耕一郎（関西大）

「實相哲学」の新しい理解の試み

喜多 源典（関西大）

「奇跡」の今日的意義を問う—「實相哲学」と体験事例を通じて—

宮本要太郎（関西大）

コメンテータ：小田 淑子

司会：喜多 源典（関西大）

---

本パネル発表では、戦前に成立した新宗教「生長の家」の創始者・谷口雅春の「實相哲学」の思想と実践を考察し、谷口自身の靈的探求の軌跡に見られる宗教体験と思想をより深く捉え、従来の研究では不十分だった問題点を明らかにすることを目的とする。先行研究では、生長の家の成立は「心靈主義→大本教→一燈園→ニューソート→生長の家」という思想遍歴への着目から説明され、谷口自身が彼独自の宗教体験に基づき、それらの体験ないし思想をどのように統合したのかを問う研究はほとんどない。

三つの個別発表では、当時の日本と欧米の広義の宗教史を概観して、谷口の思想をそこに位置づけ、宗教哲学的分析、宗教社会学的検討を組み合わせることによって、従来の研究とは異なる新たな解釈を示したい。また、この試みを通じて、現代の宗教状況において谷口の「實相哲学」の意義を考察する。一方で、現代の問題として「生長の家と日本会議」との関わりは重要なテーマであるが、本発表は谷口が立ち上げた思想の解明が基軸であるため触れないこととする。ただし、いずれ取り上げる方向で考えている。

### 1. 伊藤発表

谷口雅春の靈性思想を「内的深化の過程」として再構成する。谷口は、大本における鎮魂帰神法や神崇拝的実践に強く惹かれながらも、次第に外在的な神觀や靈媒的実践に限界を感じ、西洋スピリチュアリズムなどの文献翻訳を通して、内面に神的本質を見出す方向へ転回していく可能性がある。

また、靈的深化の中で形成された「神の子」「實相」「光明思想」といった教義には、彼独自の神觀・人間觀が表れている。さらに、大本時代に接したとされる武田惣角の大東流が体術と靈術を併せ持つ古武術であった点に注目すれば、谷口がそこに靈的構造の一端を見出していたと考えられる。また、日本・欧米における超常現象ブームの中で、1950～60年代に谷口とUFO団体との間に見られた一時的な交錯も、谷口の思想が宇宙的視座と接続しうる広がりを示している。

### 2. 喜多発表

谷口の教えの思想を彼の宗教体験との関係から捉え、その思想を宗教哲学的に考察する。谷口の「實相哲学」が単なる思想の発展ではなく、靈的探究上の挫折を繰り返した後の覺醒・宗教体験を伴う宗教的転換であることを強調する。ニューソートの「心の力による人生の変革」という教義に深く共鳴しながらも、それを実行できない自分に谷口は深く苦悩し、絶望した。その極限状況の中で、祈りを通じて神的啓示を受け、「實相」の発見に至った経緯は宗教的覺醒の典型である。本発表では、この挫折と覺醒を経験した靈的契機に注目し、先行研究が十分に解明しなかった教義形成の核心を浮き彫りにする。

### 3. 宮本発表

生長の家成立直後に見られた信者たちによる奇跡報告に注目し、重病の癒いや身体的回復といった体験を、谷口雅春および教団の宗教実践における重要な要素と位置づけて考察する。本発表では、谷口の「實相哲学」に触発された信者たちが語る奇跡体験を宗教的言説の構造として分析し、それが単なる逸話ではなく、教義の真理性と実効性を支持・証明する宗教的語りとして、どのように共同体の中で機能してきたのかを明らかにする。奇跡や神秘体験の語りが信仰共同体において果たす象徴的かつ実践的な役割を再評価することを通して、生長の家における奇跡の語りが近代合理主義的な枠組みとは異なる宗教的価値の提示装置としてどのように機能してきたか、さらに現代宗教が直面する社会的課題に対してどのような応答を可能にするのかを検討する。

以上の発表を通じて、谷口雅春と生長の家の宗教的全体像を新たに再構成し、理論的更新に資する実践的貢献を目指すものである。

なお、コメンテータは、イスラーム研究の立場から宗教学全般と日本宗教史に关心をもつ小田淑子氏に依頼し、宗教学的視点からコメントをもらい、今後の研究展開についても議論したい。

## 近世・近代の伝統仏教による教化活動—寺院・少年・女性・青年—

代表者：近藤俊太郎

近世真宗教団における教化活動とその動搖

松金 直美（大谷大）

仏教日曜学校の指針—無漏田謙恭『日曜学校のすゝめ』を中心に—

戸田 教敞（立正大）

仏教女子青年会と機関誌『アカツキ』

岩田 真美（大阪大谷大）

伝統仏教教団による青年教化—真宗本願寺派を中心に—

近藤俊太郎（龍大）

コメンテータ：芹口真結子（聖心女子大）

司会：近藤俊太郎（龍大）

### （1）本パネルの位置づけ

本パネルは、2023年4月より実施している共同研究「近代日本の教化政策と伝統仏教教団の教化活動の総合的研究」（代表者：大谷栄一、科学研究費補助金・基盤研究（B）、2023～25年度、23K25266）の中間報告にあたる。

本共同研究の目的は、近代日本における政府の教化政策、その教化政策に参加した仏教教団の役割、仏教教団の幅広い教化活動を究明することである。現在、15名の研究メンバーが「国家の教化政策」「仏教寺院における教化」「公共空間における教化」の各研究テーマについて調査・研究を実施している。

### （2）本パネルの目的

本パネルでは、とくに「仏教寺院における教化」に注目し、近世寺院における教化、児童への教化、女性への教化、青年への教化を取り上げる。近世から近代にかけて、伝統仏教がいかに教化に取り組んだのかを追い、当該状況のなかでその教化が果たした役割を解明する。

### （3）発表者の報告概要

4名の発表者の報告概要は、以下の通りである。

松金報告は、伝統仏教教団のうち真宗教団を対象に、近世において寺院などでの教化活動が整備されていく過程を確かめる。ただし正統とされる宗学が研鑽されることと連動して、教えをめぐる争論が各地で噴出することもなった。また19世紀前半の京坂「切支丹」一件では、真宗門徒からも「切支丹」が発覚したことに対して真宗諸教団の僧侶は、教諭の不十分さによるためと受け止め、徹底を図ろうとした。このような動搖を経ながらも教化活動を推し進めた真宗教団について、近世から近代への展開も見通したい。

戸田報告は、無漏田謙恭著『日曜学校のすゝめ』を中心に、仏教日曜学校の理念と実践について検討する。無漏田は真宗本願寺派僧侶であり、仏教大学生時代に「求道日曜学校」を開

設して以来、日曜学校活動を続けていた。1911（明治44）年に出版された『日曜学校のすゝめ』は、無漏田の実践をもとに作成された教案であり、日曜学校の開催次第や備品等の具体的方法が詳しく記されている。無漏田教案から明治期の仏教日曜学校の理念と活動内容を読み取りつつ、無漏田教案が大正期以降の日曜学校に与えた影響についても論じたい。

岩田報告は、仏教学者の高楠順次郎を代表として1925（大正14）年に創刊された仏教女子青年会の機関誌『アカツキ』を取り上げる。高楠の仏教女子教育の構想とも関わる仏教女子青年会は、真宗本願寺派とのつながりが深かった。そこには従来の仏教教団における伝統的な女性教化の在り方を批判し、新しい女性像を模索しようとする動きがみられる。また「母性」という言葉を用いた教化によって、女性の社会参加やナショナリズムへの接続が試みられている点にも注目してみたい。

近藤報告は、伝統仏教教団のうち、とくに真宗本願寺派に注目し、その青年教化の取り組みについて検討する。真宗本願寺派では、昭和初期の法主勝如の代替わりにあわせて記念事業として青年教化に本腰を入れることになる。ただしその実態は、青年層に浸透していくマルクス主義の影響を憂慮した政府のイデオロギー政策に呼応するものであった。そこで、文部省や宗教界全体の動向にも注意しながら青年教化の歴史的前提出掘り起こし、その教化の意義について論じてみたい。

### （4）コメンテータ

コメンテータは、近世仏教の教化に関する研究を進めてきた芹口真結子氏（聖心女子大学・専任講師）に依頼した。当日は、伝統仏教による教化の諸相を近世から近代にかけて辿ったうえで、コメンテータの指摘も踏まえながらそれぞれの教化を交差させ、伝統仏教の教化の全体像に迫るような議論ができるとを考えている。

## 人口減少社会における五大都市圏の多宗派寺院調査

代表者：相澤 秀生

概要報告

都市部寺院の実態と特徴

教化としての年中行事・法要

寺院のかかわる葬儀・法事の現状

大都市寺院における経済状況の実態と特徴

相澤 秀生（愛知学院大）

丹羽 宣子（立教大）

川又 俊則（鈴鹿大）

磯部 美紀（親鸞仏教センター）

梶 龍輔（駒大）

司会：相澤 秀生（愛知学院大）

本パネルでは、科学研究費助成事業「基盤研究（C）人口減少社会における都市寺院の実態調査－5 大都市圏の多宗派間比較を通して」（代表：相澤秀生、研究課題・領域番号：23K00077）に基づき、2024年4月に実施したWeb調査の単純集計の結果を中心に報告する。

人口減少が進む日本社会では、地方を中心に仏教寺院の合併や解散が相次ぐ。一方、大都市の寺院は、地方から流失した菩提寺をもたない人びとの供養の受け皿となり、おおむね運営は安泰であるとの見方が、研究者や寺院関係者になされる傾向があるようだ。しかし、はたしてその実態はどうであろうか。大都市に所在する多宗派の寺院を対象に実施した数量的調査が先行研究にほとんど見当たらないことも踏まえ、Web調査を実施したものである。

Web調査は、寺院構成員の年齢・性別・居住地・就業先・役割のほか、後継者、檀信徒数、寺院行事、葬儀・法事、寺院経済、他寺院や地域社会との関わり、寺院運営上の問題点など全46問からなる。5大都市圏の中心市（札幌市、さいたま市、千葉市、東京都区部、横浜市、川崎市、相模原市、名古屋市、京都市、大阪市、堺市、神戸市、北九州市、福岡市）に立地する寺院約9,000ヶ寺のうち、3,000ヶ寺の寺院関係者（住職・副住職・寺族ら）を調査対象とした。Web調査の実施にあたり依頼状を送付したが、寺院の統廃合によるとみられる不達が100件を超えた（大都市でも、確実に寺院の統廃合が進んでいることを物語るものであろう）。そのため、不達となった場合は、次点候補の寺院を調査対象とした。回収数は283票、回収率は9.4%である（信頼水準95%、標本誤差5.9%）。

発表1の相澤報告では、質問紙を共有し、Web調査に関する前提情報を解説する。

発表2の丹羽報告では、寺院構成員の属性や役割などを取

り上げる。地方から都市への人口流動、地方の過疎化・高齢化と連動した檀家制度のゆらぎは指摘されて久しく、過疎地域に立脚する寺院の現況については様々なレポートはあるが、もう一方の軸である大都市圏における寺院の実態調査、とりわけ寺院構成員に関する情報の蓄積は乏しい。本報告では、その基礎データを提示することに努めたい。

発表3の川又報告では、寺院にとって大切な教化活動である年中行事・法要に注目する。現代の大都市圏における寺院で、これらはどのように実施されているのだろうか。参拝者が多い行事の特徴（参加人数、檀信徒の割合）、檀信徒のかかわり方、他寺院僧侶の協力（年中行事・法要、葬儀・法事）、宗派系統別の特徴などをしていくこととする。

これを踏まえ、発表4の磯部報告では、寺院と人びとが接点をもつ重要な契機であるとして、葬儀・法事に着目しながら寺院の実態を示す。大都市における葬儀・法事を通した檀信徒・檀信徒以外との関係は現状、いかなる特徴を有しているのか。葬儀や法事のあり様を数量的に捉えたうえで、月参りや棚経といった寺院外での付き合いについても注目してみたい。

最後となる発表5の梶報告では、寺院経済を取り上げる。寺院一般にとって、宗教活動による布施収入が寺院運営上の経済基盤であることは間違いない。本発表では、葬儀や法事の際に生じる布施額や年間法人収入額といったデータを用いて、大都市の寺院における経済状況の実態を明らかにする。くわえて、地域や宗派系統、他調査との比較といった観点から、その特徴について考察するものとする。

以上の5発表を終えた後、質疑応答により情報共有を深め、全国調査の実施に向けた研究上の課題を広く見出すことしたい。

## 国際委員会企画パネル

**New Directions in the Study of Japanese Religions: Reviewing *New Nanzan Guide***

Convener : Matthew D. McMULLEN

On the Production of Knowledge in Japanese Religions KIMURA Yunosuke (Tohoku Univ.)

On Space and Environment in Japanese Religions Carla TRONU MONTANÉ (Institute of Science Tokyo)

On Feeling and Belonging in Japanese Religions Ioannis GAITANIDIS (Chiba Univ.)

On Politics and Governance in Japanese Religions KATO Masato (Tenri Univ.)

Commentator, Chair : Matthew D. McMULLEN (Nanzan Institute for Religion and Culture)

The 2006 publication of *The Nanzan Guide to Japanese Religions*, edited by Paul L. Swanson and Clark Chilson, has served as the one of the most impactful study guides in the field of Japanese religions for almost twenty years, especially in the Anglophone scholarship. Two decades later, the Nanzan Institute for Religion and Culture has published a companion volume, aptly titled *The New Nanzan Guide to Japanese Religions*. Edited by Matthew D. McMullen and Jolyon Baraka Thomas (University of Pennsylvania), the new volume expands on the historical and traditional orientation of the first volume with thematic chapters organized in seven sections. The new volume includes contributions from over forty leading international scholars (including the members of the JARS) and is intended to serve as an indispensable reference in the field of the study of Japanese religions for decades to come.

This panel invites four panelists and asks each to address the content of the following sections: "Knowledge and Production," "Cosmology and Time," "Space and Environment," "Feeling and Belonging," and "Politics and Governance." In response to their critical assessment, one of the coeditors, Matthew D. McMullen, will attempt to assuage their inquiries into the contents of the book as well as discuss the potential impact of the volume on the field of Japanese religions. Through an active exchange of ideas and opinions, this panel aims to highlight the current situation of the study of Japanese religions and to build a bridge between the JARS members and international scholars.

Kimura Yunosuke: "On the Production of Knowledge in Japanese Religions"

How knowledge is produced and transmitted reflects the priorities of a culture, the ideas and information it considers important to preserve, and the various lens through which it wishes to be viewed by the global community. "Religion" is a vehicle that transports such knowledge from the past to present and across intercultural boundaries. In his review of the chapters in this section ("Sacred Materials," "Monastic Debate," "Ritual Medicine," and "Academia"), Kimura Yunosuke will discuss the ways religious knowledge has been produced in Japan what this might tell us about the nature of Japanese religion.

Carla Tronu Montané: "On Space and Environment in Japanese Religions"

As an archipelago, the modern nation-state of Japan is a convergence of mountains and the sea. It is within these terrestrial and aquatic spaces that religion is given meaning. By localizing religion in the Japanese archipelago, it becomes clear that "Japanese religion" is as

diverse as the geography it inhabits. From the Ainu Mosir in the north to the Ryūkyū Islands in the south, ritual, myth, and the environment have shaped religious culture from the ancient past to the present. Reviewing the chapters in this section ("Sea," "Mountains," "Migration and Diaspora," "Space and Power in Okinawa," and "Animals in Ritual Practices"), Carla Tronu Montané will illuminate how space and environment contribute to the foundation of religious culture in Japan.

Ioannis Gaitanidis: "On Feeling and Belonging in Japanese Religions" "Religion," however one defines it, necessarily includes people. People belong to the organizations that often constitute religion, and, thus, the feelings, emotions, and concerns of people inevitably impact the goals and ideals of these organizations. In other words, if religion is conceived of as a network of relationships between people (and other-worldly beings), then to understand religion in a given cultural context it is essential to consider the emotional, affective, and sentimental elements that bind and unbind these relationships. Ioannis Gaitanidis will review the chapters in this section ("Confraternities," "Homiletics," "Spiritual Care," and "End of Life Care"), which bring into focus the fundamental role that belonging and feeling have in the study of religion in Japan.

Masato Kato: "On Politics and Governance in Japanese Religions" "Religion" is a political category as much as it is a legal and conceptual one. Even in an ostensibly democratic country such as Japan, which has a constitution strictly mandating the separation of religion and the state, the government has an outsized say in what does and does not constitute religion. The academic study of religion also contributes to this political notion of religion by lending authority to government sanctioned orthodoxies. Religious groups in turn seek to maneuver such expectations and restraints by crafting ways to maintain relevance in wider society. In his review of the chapters in this section ("Sovereignty," "The Two Constitutions," "Incarceration and Chaplaincy," "Political Activism," and "Electoral Politics"), Kato Masato will discuss how the concept of religion in Japan has, in many ways, come to be defined through politics and efforts of governance at various arenas and historical junctures.

Each of the above reviews will be followed by a response from the volume's coeditor, Matthew D. McMullen. Questions and comments from the audience will be welcomed as time permits. Discount codes for purchases of *The New Nanzan Guide to Japanese Religions* will be provided for in-person attendees.

## 新異教主義運動の宗教史的変容—その両極性に着目して—

「ゲルマン信仰共同体」における神話化／非神話化の問題  
ゲルマン的ネオペイガニズムに見る自己／他者表象の変遷  
リトニアの新異教運動—その展開と現在—  
文化としてのドルイド、宗教としてのドルイド

代表者：深澤 英隆

深澤 英隆（一橋大）

久保田 浩（明治学院大）

後藤 正英（佐賀大）

河西瑛里子（国立民博）

コメンテータ：松村 一男（和光大）

司会：深澤 英隆（一橋大）

近現代異教主義 (modern paganism) ないし新異教主義 (neo-paganism) は、通常キリスト教地域において、キリスト教以前の自然宗教の再興をめざす宗教運動を指す。先行形態はヨーロッパ各地で見られ、19世紀末ドイツでは、一群の運動体として本格的に出現した。以降第2次大戦を挟んで戦後、とりわけ70年代以来欧米各地で新異教主義とみなしうる運動体が数多く出現して、今に至っている。しかし新異教主義の総称で呼ばれながらも、これらの思想・実践潮流は、親神話的／脱神話化的、再構成主義的／折衷主義的等々、さまざまな多様性と両極性を内に含んだ現象である。本パネルでは、地域を異にする4事例をとりあげ、そうした両極性に着目しつつそれぞれの特色を浮き彫りにし、その時代的変容にも注目することにしたい。

深澤の発表では、1912年に創立され、指導者L・ファーレンクロークに率いられた戦前期の「ゲルマン信仰共同体」(=GGG)と、1990年代に再興されたGGGの両者における神話的なるものとの関わりやゲルマン的伝統の理解を比較検討する。戦前期GGGでは、ゲルマン神話(エッダ伝承)の脱神話化的解釈と哲学的・芸術宗教的世界観を核とする「現在宗教」としてのドイツ＝ゲルマン信仰の確立が目指されたが、90年代に復興したGGGは、「新異教主義」に対しあえて「古異教主義」を標榜し、伝統の再構成的儀礼行為を積極的に行う集団に変貌した。その変化の背景には、さまざまな(宗教)史的原因があることを論じる。

久保田は、ナチ政権成立を機に結成された「ドイツ信仰運動」の機関誌『ドイツ的信仰』(1934年創刊)と、1980年代以降ネオペイガニズム運動関係者によって編まれた定期刊行物『異教年報』(2006年創刊)に着目し、両時期の政治的・宗教文化的文脈の相違を確認した上で、ゲルマン的ネオペイガニズムの歴史的変遷を論ずる。両刊行物は、一見すると共約不可能

な思想傾向を有する諸団体を包摂しつつも、統一的なペイガニズム運動の構築を目指している。本発表では、思想的・組織論的相違を超えて、如何なる集合的自己が構築されようとしたのかを、神話理解、科学性・学問性理解等、他者の構築過程の諸側面に着目しながら検討する。

後藤の発表では、リトニアのロムヴァアを取り上げる。ロムヴァアは、バルトの古代宗教復興を目的とする宗教団体であり、宗教弾圧が厳しかったソ連時代に活動を開始した。ロムヴァアは、折衷主義的なニューエイジとは異なり、あくまで伝統復興を目指す団体であり、世界の土着民族宗教との連携も推進している。ロムヴァアは、民俗学や神話学の学位をもつ知識人たちによって牽引されている点に特徴があり、近年は女性祭司たちの活躍が目立つ点も特筆すべきである。本報告では、ロムヴァアの形成過程をその前史(20世紀前半に活躍したヴィドゥーナスなど)を含めて概観しつつ、リトニアの新異教運動がもつ特徴について考察したい。

河西は、古代ケルトの神官「ドルイド」の名前を冠した流れを取り上げる。ヨーロッパ各地にいたとされるケルト系の人々は現在、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、ブルターニュ等に多く暮らしているとされ、19世紀にはその文化復興の一環として、ケルトの伝説などと共にドルイドが注目され、儀式の再現を試みる者も現れた。とはいえたるドルイドを名乗っていた人々はキリスト教徒である。現代でもそのようなドルイドもいるが、20世紀半ばからは自らの信仰としてドルイド教を選択した人々も出てきている。本報告では、現代のイギリスでドルイド教が信仰として支持されている背景について、フィールドワークに基づき考察する。

コメンテータとしては、神話研究の第一人者であるとともに、現代における神話的なるものの作用についても深い関心を抱いておられる松村一男氏を迎えて万全を期した。

## 戦中から戦後に到る宗教（史）研究－日本と「東亜」をめぐって－

代表者：飯島 孝良

禅文化史観と「大東亜史」－芳賀幸四郎の戦中と戦後を参照軸に－

飯島 孝良（花園大）

西谷啓治における「東亜」と「神ながらの道」

齋藤 公太（北九州市立大）

柳田聖山における戦争体験とその思想への影響

何 燕生（郡山女子大）

戦中から戦後における家永三郎の時代認識とその仏教史研究の関係

小田 直寿（大阪電気通信大）

コメンテータ：岩田 文昭（大阪教育大）

司会：飯島 孝良（花園大）

いわゆる「戦後歴史学」は、自律的主体としての「民衆」を重視するものであり、それが戦前の国家＝天皇中心の歴史觀を反省するものと位置付けられてきた。この「戦後歴史学」が50年代の対米意識と世界的な「民族独立」的動向と呼応した「国民（史）」へ問い合わせつつ、明治以来の日本国家（觀）へ反体制的な批判を展開しながらも、最終的に「日本」という主語で国民国家を語るものとなつたとも批判的に回顧されている（歴史学研究会編『戦後歴史学再考』2000、同編『「戦前歴史学」のアリーナ』2023）。こうした中、戦中の歴史家や思想家や宗教研究者らに構想された「東亜」という枠組は、戦後に厳しい批判にさらされたが、これは皇国史觀に基づく帝国主義の理論的裏付けともなれば、世界史的な「民族」を語り得るものともなり得たのではないか——このパネルの課題は、こうした「東亜」という枠組に関連した日本の宗教（史）研究が戦中から戦後にどう変遷したか、これを批判的に再検討することにある。

飯島孝良の発表では、禅文化史を研究していた芳賀幸四郎の戦時中の論述と、1942年頃から中国やインドに対する日本側の觀点に基づいて文部省が編纂しようとした『大東亜史』（未完）とでは、〈外来文化を巧みに受容しながら日本独自の歴史と文化を形成した〉という点で共通する意識があり得たことを取りあげる。この『大東亜史』の編纂囑託一覧からは、当時第一線の佛教研究者が相当数参画していたことがわかる。これらの佛教史觀では、戦前と戦後で共通した枠組をとりながらも、同じ枠組から「大東亜共栄圏」的に「民主」的に読み解くことが出来たとも思われ、発表中で分析を試みる。

齋藤公太の発表では、京都学派の宗教哲学者として知られる西谷啓治が「東亜」をどのようにとらえていたのか、「神ながらの道」をめぐる議論から逆照射することで再検討を試みる。西谷は、戦時中には日本と「東亜」において「主体的無」の宗教性が共有されていると見なし、それによる「近代の超

克」を説いた。しかし日本が「東亜」の「盟主」たらんとすることを正当化するために、西谷は『神皇正統記』に見られる「神ながらの道」に着目し、日本の独自性を説くという矛盾も抱えていた。本報告では戦後の西谷の神道論も取り上げ、西谷の思想が戦中から戦後にかけてどのように変化していったのかを考察する。

何燕生の発表では、中国禅宗史研究で重要な成果をあげた臨済宗出身の禅宗史学者・柳田聖山に注目し、その個性的な思想を検討する。柳田は、唐代とくに禅宗初期の語録類に注力し、宋代以降の『碧巖録』や『無門関』に関する本格的な研究は避け、いわば「唐を重んじて宋を軽んじる」という特徴を見せた。また、禅宗の人物に関していえば、基本的にダルマや慧能、臨済義玄、普化、一休、良寛が中心であった。なぜそのような個性的な特徴を見せたのか。本発表は『臨済ノート』を手掛かりに、柳田の戦争体験、義父・柳田謙十郎の思想との関係、服部之總の『親鸞ノート』の影響なども視野に入れて、柳田聖山の「戦後」について考える。

小田直寿の発表では、戦前には「否定の論理」を視角とする佛教思想史研究により、また戦後には教科書裁判を頂点に平和主義・民主主義に関わる諸実践により著名であった歴史学者・家永三郎が、戦中から戦後にかけてどのような時代認識をもち、また佛教史研究にどのように反映していったかについて、再検討を試みる。青年時代以来家永の社会思想は国際協調的な自由主義であり、それだけに戦時下には思想的蹉跌の只中にあった。戦後、戦争責任の自覚につれて思想を社会的機能の觀点から捉えるようになってゆく。そのなかで「否定の論理」への捉え方が変容を遂げていく姿を考察する。

4つの報告の後、宗教哲学や日本宗教思想史に通暁した岩田文昭のコメントを受け、フロアも交えた意見交換に進む。

## 「メディア宗教」という視座—独立系宗教家と近代日本宗教史—

「紙上の教会」と「空中の教会」—塚本虎二の無教会伝道—  
石丸梧平の人生創造運動—仏教的教養・修養・人生論—  
易道・太靈道・止觀—伊藤延次の宗教遍歴とその終着点—  
高橋正雄個人雑誌『生』の担い手たち

代表者：赤江 達也

赤江 達也（関西学院大）

大澤 紗子（東北大）

木村悠之介（東北大）

藤井 麻央（大谷大）

コメンテータ：星野 靖二（國學院大）

司会：大澤 紗子（東北大）

かつて吉永進一は、明治期の新仏教運動を学知や自由討究を重視する「知識人宗教」と捉え、同時に活字媒体に依存しているという意味で「メディア宗教」と呼んだ（新佛教研究会編2012）。本パネルは、この「メディア宗教」概念を継承しつつ、活字メディア上で「宗教的」言説が氾濫する大正期を中心に、近代日本宗教史を捉えなおす試みである。

「メディア宗教」とは「メディアと一体化した宗教的実践」である。メディアと宗教については、教団の宣伝布教や機関誌のような「宗教教団のメディア利用（=宗教メディア）」を中心に研究が蓄積されてきた。他方、教団から離れた個人の雑誌や言論は、主に思想や文学の領域で研究されてきた。しかし、相対的にマイナーな「独立系宗教家」たちは、教団史では見落とされがちであり、宗教思想史でも注目されにくい。

明治後期には、内村鑑三（1861-1930）や清沢満之（1863-1903）のように教団を超えた影響力をもつ「宗教思想家」が登場する。その後、大正期から昭和初期にかけて、教団から半ば自由に宗教を語る求道的な書き手が数多く登場する。こうした独立系宗教家たちは、しばしば雑誌や書籍などのメディアによって宗教運動を形成し、独特の宗教的ランドスケープを形成した。

本パネルでは、独立系宗教家たちの諸実践を横断的に検討することで、活字メディアの時代における「メディア宗教」的な運動の諸相とその宗教史的な地盤を浮かび上がらせてみたい。

赤江報告では、内村鑑三の後継者と目された無教会キリスト者・塚本虎二（1885-1973）の伝道を検討する。塚本は、内村の無教会運動＝「紙上の教会」の半ばを引き継ぐようにして独立する。そして雑誌『聖書知識』（1930-1963年、1973年終刊）を発行し、東京・丸の内で聖書講演会を継続した。さらにラジオにも出演し、その活動を「空中の教会」と呼んだ。その展開を辿りながら、宗教思想運動における脱制度志向の実

装とその様態を論じる。

大澤報告では、作家・石丸梧平（1886-1969）の個人雑誌『人生創造』（1924-1969年）を中心とする宗教的運動に着目する。石丸は、僧侶でも特定宗派の信徒でもない立場で、大量の宗教的言説を発信し続けた。師範学校の生徒、教員、仏教青年会の学生を主とする石丸の読者は、雑誌を読み、仏教講座や参禅会に参加し、ラジオを聴きながら仏教的な学びと実践に取り組んだ。報告を通して、近代日本の宗教史・精神史における石丸の運動の意義を検討する。

木村報告が注目する伊藤延次（生没年不詳）は、太靈道の雑誌『太靈道』（1917年発刊）で編集を担った人物として知られるが、1903年に雑誌『易道』を発行し、易を「諸宗教ノ王」と位置づけていた。同誌には神道関係の記事も見られる。他方、太靈道を離れる少し前の1922年には「親鸞主義」や「日蓮主義」も意識しつつ著書『止觀』を刊行する。伊藤を追うことで、儒教・陰陽道・神道（易）、新宗教・靈術（太靈道）、仏教（止觀）を越境し最終的にはメディア宗教運動それ自体から離れていくというような、周縁からのメディア宗教史を描くことを目指す。

藤井報告で取り上げる金光教の高橋正雄（1887-1965）の個人雑誌『生』（1929-1965年、1944-1947年休刊）は、高橋のための「舞台」として周囲の人びとによって創刊されたため、出版元である篠山書房や各地の同志たちの主体的かつ積極的な活動がなければ継続しえなかつた。本報告では、彼らを『生』を構成する「担い手」と位置づけ、同志たちによる各地のサークルの発生状況と活動内容、主要人物を明らかにする。そして、雑誌という活字メディアを媒介に形成されるサークル間のつながりや高橋と周囲の付き合いに注目したい。

星野靖二是、近代日本宗教史叙述などの観点からコメントする。

## 日本のアニミズム的宗教論の系譜をたどる

代表者：外川 昌彦

フェノロサが紹介した宗教進化説とタイラーの宗教論

外川 昌彦（東京外国语大）

井上円了の妖怪学とアニミズム的宗教論の系譜

甲田 烈（東洋大）

姉崎正治の民間信仰論とアニミズム的宗教論の系譜

會澤 健裕（中央学術研究所）

宇野円空の宗教民族学とアニミズム的宗教論の系譜

鈴木 正崇（慶大）

コメンテータ：田中 雅一（国際ファンクション専門職大）

司会：外川 昌彦（東京外国语大）

本パネルは、日本古来の固有の信仰の在り方として語られ、人類学的な存在論やアニメ文化、ロボットやAIに人格を認めるテクノアニミズムなどを通して語られる日本のアニミズム的宗教論の系譜を、特に、エドワード・タイラーによって定式化されたアニミズム論の日本への紹介と受容、及びその日本的な解釈の展開を通して検証する。

具体的には、タイラー学説を含む宗教の進化説を紹介したアーネスト・フェノロサ、そのフェノロサの教え子で独自の日本の宗教論を提唱した井上円了、日本の宗教学の祖とされ、英語の *animism* を日本語で紹介した姉崎正治、文化人類学の観点からアニミズム論を体系的に紹介した宇野円空を取り上げて、それを近代日本の宗教学説の系譜を通して検証する。

世界各地の民族誌的事実を通文化的に比較する分析手法を体系化したタイラーは、オックスフォード大学の人類学講座の初代教授となり、主著『原始文化』（1871年）では今日も共有される「文化」概念を提起することで、「文化人類学の父」とされる。その『原始文化』でタイラーは、世界各地の民族誌に見られる斉一的な宗教的体験をアニミズムとして定式化し、それを宗教の最小限の定義とする。タイラーは、次のように述べている（『原始文化』第一章）。

「アニミズムとは、靈魂とその他の靈的存在一般に関する教義のことである。本書の半分以上は世界のあらゆる地域から得られた大量の証拠資料で占められているが、これらはいざれも〈宗教哲学〉における重大な要素〔アニミズム〕の本質と意味を明らかにし、その伝達、拡張、限定、変容の過程を、歴史の道筋に沿って、私たちの現代的思考の只中にまでたどるものである。」

ここでタイラーが強調するのは、未開社会の土着信仰に留

まらず、靈的存在に関する思考の在り方が、伝達、拡張、変容を通して現代的な思考にも影響を与えてゆくという経緯である。一般に、19世紀の社会進化説として整理されるタイラーは、メキシコでの約4か月の現地経験をまとめた『アナワク』（1861年）を著し、ロンドンでは約一月間の参与観察を行うなど、「安楽椅子」としては片づけられないフィールド体験を持つ。人種的優越論を導く文化的適応説ではなく、新たな状況に適応した社会が、それ以前からの慣習や観念を継承する過程を「残存」として捉え、それをアニミズムを理解する枠組みに結びつける。本パネルもまた、このようなタイラー学説の日本への伝達や拡張、その変容の過程を通して、アニミズム論が日本の宗教論に与えた影響を検証するものである。

はじめに、外川昌彦は、タイラーの宗教論の日本での最初期の紹介者と考えられるフェノロサの「宗教沿革論」（1878年）とそれが教え子に与えた影響を検証する。甲田烈は、その東京大学での教え子のひとりで、欧米の心靈主義や心理研究に対応した妖怪学を着想し、『仏教活論序論』（1887年）を著した井上円了を取り上げる。會澤健裕は、日本の宗教学の祖とされ、「中奥の民間信仰」（1897年）や「比較宗教学」（1897年）でタイラーに依拠して日本の民間信仰を理解する枠組みを提示した姉崎正治を取り上げる。鈴木正崇は、宗教人類学を体系づけた先駆的な著作『宗教民族学』（1927年）でタイラー学説を紹介し、『修驗道』（1934年）で独自の日本宗教論を唱えた宇野円空を取り上げる。最後に、コメンテータの田中雅一は、デュルケームの宗教社会学やマリノフスキの文化人類学に至る、世紀転換期の欧米の宗教学説の展開に位置づけて、以上の議論を検証する。

## 宗教団体における実践と論理

代表者：渓 英俊

渓 英俊（龍大）

堀 玲子（宗教情報センター）

棟高 光生（中山身語正宗教学研究所）

金子 昭（天理大）

コメンテータ：西出 勇志（共同通信社）

司会：渓 英俊（龍大）

宗教教団における自浄作用とカルト化の抑制論理考

現代社会のなかでの宗教実践のあり方—真如苑の事例から—

現代社会における宗教的修行をめぐる諸問題

天理教における“事情教会”問題—新たな展開可能性への模索—

宗教教団においては、儀礼や修行といった宗教的実践が日常的に行われている。これらは教義や理念に基づき、信仰を体现する営みである。また社会貢献、福祉事業などの社会的実践も、教団の理念や価値観に基づき展開されている。これらの実践の背景には、それぞれの教団ごとに積み重ねられてきた論理が存在する。ここでいう論理とは、教義や理念にとどまらず、宗教的実践に根拠を与え、方向づける理論的・価値的枠組みを意味する。

しかし現代社会においては、こうした宗教教団内部の論理と実践の関係は、外部からは理解しにくく、不透明なものとみなされがちである。

2023年12月に成立した「特定不法行為等被害者特例法」や、2025年3月に東京地裁から出された旧統一教会に対する解散命令などを考えると、献金や修行といった宗教的実践が、社会的にどのように評価され、規制されうるかが問われているといえよう。

信仰上の論理からすると、実際の宗教的実践には、一般社会から見ると理解しがたい面もあるだろう。しかし、過去の解散命令（オウム真理教、明覚寺）とは異なり、今回、民法上の不法行為が根拠となったことは、宗教教団がその実践を社会的に説明しうる論理で支えると同時に、社会との軋轢を生じさせないような実践面での論理化や、カルト化を防止する自浄的な仕組みを構築する必要性があることを示していると考えられる。

本パネルでは、それぞれが宗教教団に属する研究者として、各々の教団の実践論や理念を軸に検討し、宗教的実践とその論理の相關を明らかにすることにより、現代社会における宗教教団の透明性、自律性、社会的信頼のあり方を再考し、今日的課題への対応の手がかりを見出すことを目的とする。

（渓）2022年の安倍元首相銃撃事件以降、旧統一教会の問題がクローズアップされた。関連する特例法が施行され、さらに同教団に対する解散命令も出された。宗教者の中には、このような施策は旧統一教会を対象にしたものであり、それ以外の宗教教団は該当しないから、心配する必要はないとする

向きもある。しかしながら、献金や勧誘など、一般的な宗教実践との線引きが難しいことも事実である。浄土真宗本願寺派の事例を通じて、宗教教団の自浄作用とカルト化の抑制論理について検討する。

（堀）本年、地下鉄サリン事件から30年を迎える。3月には旧統一教会に対する解散命令が東京地裁より出された。報道においても宗教組織への忌避の論調は多く、他の宗教教団の献金や布教、見えない世界へのアプローチが批判される場面も見られる。宗教は理性を超える領域を扱うため、解説に困難を伴うが、個人の心身の健康や家族の生活を守りながら、現代社会に理解されうる宗教実践とは何か、真如苑の教義と活動の事例を通じて考察する。

（棟高）カルト問題についての関心が高まっている現代社会では、教団組織などにおいて、悟りや幸福などの宗教的価値の実現を目指して精神的・肉体的な試練（修行）が課される場合、修行のプロセスやその結果から生ずる負の側面にも注意する必要がある。これは苦をどのように受け止め克服するかという問題でもあるが、本発表では、宗教者が現代社会の公序良俗を保ちつつ、その本来の理念を具現するための実践のあり方や可能性を模索したい。

（金子）天理教においては現在、約1万4000の教会があるが、財政上の困難、教会長の不在、信者の離散など、様々な問題（教会事情）を抱えている教会も少なくない。その中で教会としての存立が困難な状態となった教会を“事情教会”と呼ぶ。本発表では、そうした教会に焦点を当てて、そこで関係者がどのような信仰的葛藤に直面してきのかを振り返り、その上で、この問題を信仰継承や社会実践との関連で受け止め直して、教団としての新たな展開可能性を模索する。

（西出）メディアの視点から、コメンテータとして各発表者のパネルにコメントを行う。

## バーチャル葬儀のゆくえ—映画で描く近未来像と世界の最新事例—

代表者：瓜生 大輔

デザインフィクション映画制作を通したバーチャル葬儀のデザイン オーストラリアのバーチャル葬儀—「移民の国」での適応状況— 台北市における遠隔葬儀参列の現況報告 遠隔中継技術がつなぐ「距離」一日韓を跨ぐ葬儀中継の経験から—	有馬 俊（慶大） 瓜生 大輔（芝浦工業大） 高木 良子（東京科学大） 金セッピヨル（甲南大）
	コメンテータ：堀江 宗正（東大） 司会：瓜生 大輔（芝浦工業大）

「バーチャル葬儀」を題材とする映画『それはかつてあったから』(<https://interfuit.info>) を起点とし、今後の葬儀のあり方を展望する。瓜生、有馬の共著で Human-Computer Interaction (HCI) 研究の国際会議 CHI '25 にて、映画の制作動機・過程、バーチャル葬儀のデザイン提案をまとめた論文を発表した (Uriu & Arima 2025)。研究成果の一部である映像作品の上映を含む本パネルは、通常の研究発表とは大幅に異なる時間配分で実施される。

本パネルでは、映画本編（約37分）の上映後、その学術的意義を概説する。続いて、オーストラリア、台湾、韓国におけるバーチャル葬儀の最新事例を報告する。本パネルを通して、映画が描く近未来像と海外の事例を手がかりに、コロナ禍を経た日本においては「過去のもの」とされつつあるバーチャル葬儀（瓜生 2024）の意義と価値を前向きに問い合わせる。

以下、各発表・コメントの概要を記載する。

有馬：デザインフィクションとは、映像制作を通して未来のデザインを思索・検討するアプローチである。現実の葬儀の現場で新たなデザインを試行錯誤するには困難が伴うため、本アプローチが採用された。本発表では、映画内で描写されたバーチャル葬儀に関するデザインの意図や制作過程を紹介するとともに、これまでに得られた鑑賞者からの意見や感想もふまえながら、今後のデザインへの示唆を述べる。

瓜生：国民の大半が外国からの移民で構成されるオーストラリアでは、遠く離れた土地に暮らす親族が葬儀に参列できないケースが稀ではない。とりわけコロナ禍の移動制限に伴いバーチャル葬儀サービスが発達した。本発表では、オーストラリア・メルボルンを拠点に遠隔配信サービスを提供する事業者と、ユダヤ教徒向けの葬儀・墓地運営会社への調査報告を中心に、「バーチャル葬儀が根付いた社会」を展望する。

高木：台湾・台北市では、葬儀の様子をネット中継するサービスが提供されている。本発表では、台北市の葬儀場・火葬場・墓地を管轄する「台北市殯葬管理處」および台北市民へのインタビュー調査をもとに、同市における遠隔葬儀参列の現状を明らかにする。また、日本の状況と比較しつつ、両国の宗教観や死者観の違いを考察する。

金：コロナ禍の移動制限を背景に登場した遠隔中継技術の役割は、単に物理的距離を埋めることにとどまらない。遠隔参列者たちは、それぞれ異なる立場から故人との関係を築いてきており、その多様な関わり方が中継技術の使い方にも反映される。本発表では、発表者自身が中継者として関わった日韓をまたぐ葬儀中継の経験をもとに、遠隔参列者がどのように葬儀に関与するのかを考察し、今後のバーチャル葬儀のあり方を検討する。

堀江：東京大学死生生物学・応用倫理センターにて2019年に死生観調査、2021年にコロナ死生観調査、2024年に死生観調査を実施した経験をもとに、COVID-19 が葬儀に与える影響についていくつかのシナリオを立てて。これらのシナリオの妥当性を、本パネルの各発表内容をもとに検討するという形式でコメントを提供する。

### 参考文献

- Daisuke Uriu and Shun Arima. 2025 “Designing Virtual Funerals as a Design Fiction: A Film-Based Exploration of Near-Future Memorial Rituals.” In Proc of CHI '25. <https://doi.org/10.1145/3706598.3713399>
- 瓜生 大輔 2024 「遠隔葬儀参列の現状—コロナ禍を経た今後の展望—」『宗教研究 第97巻 別冊 第82回学術大会紀要特集』104-105頁。

2025年7月7日発行  
編集・発行 日本宗教学会 第84回学術大会実行委員会  
HP : <https://jpars.org/conference/>